

却来花

『世阿弥十六部集』では『七十以後口伝』と改題しているが、これは吉田東伍博士の案出したものにすぎず、その底本（松廻舎本）には『却来華』という外題が与えられていた。本来は無題だったと思われるが、いま松廻舎本に従う。

「却来華」とは、却来風の花という意味であろうが、これは全三項のうち第一項だけについての題名で、全体的には無題であつたらう。あとの二項は、却来風とは関係のない事がらである。いくつかの項目のうち、最初の項に述べられている事がらを全体の総名であるかのごとく扱った例は、他にも『音曲声出口伝』がある。

この点は、内容の理解に重要な関係がある。能勢博士は「却来花の秘伝は、先づ世阿弥最後の伝書と見るべきものであるが、書かれてある内容の深さといふ点より見れば、六十歳前後の秘書の一群に比べて、遙かに神彩を欠くものと言はざるを得ない」とされる。本書の所説に関しては、確かにそのとおりだが、それは、却来風という演じかたに対する価値批判と混同されてはならない。却来風は、世阿弥が最後に到達したところであつて、おそらく至妙の芸態であつたらうが、あまりにも重大で、説明すればかえつて誤解されるおそれがあつたので、元雅に口伝で授けたのである。ところが、元雅が早世したので、せめて却来風という名目の存在だけでも言い残そうとしたのが、本書の第一項なのである。したがって、深遠な芸理を説くことなどは、はじめから予定されていない。あとの二項は、単なる付載であろう。テクストとしては、松廻舎本しかない。よつてこれを底本とした。

却来花

却来花

当道の芸跡の条々、亡父の庭訓を受けしより以来、今、老後に及んで、息男元雅に至るまで、道の奥儀、残りなく相伝終りて、世阿は一身の一大事のみを待ちつるところに、思はざる外、元雅早世するに因て、当流の道絶えて、一座すでに破滅しぬ。さるほどに、嫡孫はいまだ幼少なり。やる方なき二跡の芸道、あまりにあまりに老心の妄執、一大事の障りともなるばかりなり。たとひ他人なりとも、その人あらば、この一跡をも預け置くべけれど、しかるべき芸人もなし。ここに金春大夫、芸風の性位も正しく、道をも守るべき人なれども、いまだ向上の大祖とは見えず。芸力の劫積り、年来の時節到りなば、定めて異中の異曲の人となるべき。それまではまた、世阿が世命あるまじければ、恐らくは、当道に誰あて、印可の証見をも頭はすべきや。ただし、元雅は、金春なら

わが芸の演じかたについて、いろいろ亡父の教えを受けて、自分がこれを伝えて以来、現在、老境に入つて、嫡男元雅にいたるまでの間に究めえた道の奥儀は、すっかり伝授し終つて、自分は、もう往生の期を待ただけだったのであるが、思いがけなくも元雅が若死にしたので、わが芸統は断絶し、一座はもう破滅してしまつた。それに、嫡孫はまだ少年である。いまや伝える者もない亡父と自分でうち建てた芸の伝統を思うと、老いはてた心にも執着はあまりにもはげしく、往生のさまたげとなるばかりである。たとえ他人でも、それに向いた人物があれば、せめて自分の分だけでも伝授しておくことはできようが、適当な技芸者もない。ただ、金春大夫は、芸風の素質も正しく、伝統を保つてゆける人物でもあるが、まだ、たしかに名人にまでなれそうな大物とは思われない。芸力に年功が加わつて、その時節になつたならば、きつと群を抜いた達人となるであろうが、それまでは、わたくしの寿命が保つまいから、わが芸において、何人も、芸の奥儀をすっかり伝えたという証拠を舞台で

では、当道の家名を、後世に残すべき人体系らずと思ひけるやらん、一大事の秘伝の一卷を、金春に一見を許しけるとや。

そもそも、元雅、道の奥儀を究めつくすといへども、ある秘曲一箇条をば、四十以前は外見あるまじき秘曲にて、口伝ばかりにて、その曲風をば頭はさざりしなり。これは、却来風とて、四十以後、一期に一度なす曲風なり。元雅は、芸道は、はや究めつくしたる性位なれども、力なく、五十に至らざれば、その技をなすこと、あるまじき秘伝にて、口伝ばかりにてありしなり。最期近くなりし時分、よくよく得法して、無用の事をばせぬよし、申しけるなり。無用の事をせぬと知る心、すなはち能の得法なり。

そもそも、却来風の曲と云ふ、無上妙体の秘伝なり。「望却来、却来不急」と云へり。これは、口外なき秘曲なるに依て、元雅一人の相伝なれども、早世のうへは、後世に曲名をだにも知る人あるまじければ、紙墨に載するところ、深秘々々。

と思われるので、これを書きつけておくのであるが、深く秘すべきものである。

あらわすべき者はなかるうと憂慮する。もつとも、元雅は、金春大夫よりほかには、申樂におけるわが家名を後世に残す人物は無いと思つたのであろうか、重大秘伝の一卷を、金春には見せてやったかということである。

いったい、元雅は、芸道の奥儀を究めつくしてはいたが、ある秘曲の一条だけは、四十歳以前の者には、演じてはいけなるとされている秘曲で、元雅にも口伝として伝授しただけで、その演じかたを実際には見せなかつたのである。これは、却来風といつて、四十歳以後に、一生に一度かぎり演ずるといふ行きかたのわざである。元雅は、すでに芸の道は究めつくした確かな境地だったが、まだ五十歳に達していないので、そのわざを演じてはならないという秘伝であつたゆえに、やむをえず、口伝として教えただけであつた。元雅も、亡くなる頃に近くなつた時分には、すっかり眼が開けて、「しなくてはむ事はない」と言つていたのであつた。しなくてはむ事をせぬもののだという点を理解するということ、これこそ能における悟りである。

いったい、却来風の曲というのは、この上ない絶対的な芸の秘伝である。「却来を願うけれども、急いで却来の境に達しようとしてはいけない」ということがある。これは、他人に言つてはならぬ秘曲であるから、元雅だけに伝授したが、若死にされてみると、後世にはかような曲名をさえも知る人はなかるう

- 1 却来花 『世阿弥二十三部集』の頭注に「『かうらい』とも『けふらい』とも両方よんでゐる」とあるが、抛り所は不明。「却来」は禪語で、キヤクライまたはキヤライとよむ。世阿弥はキヤクライとよんだらしい。『五音曲』(三三三頁)に見える「却来」も、宗節本に「キヤクライ」と振り仮名がある。
- 2 亡父 観阿弥。
- 3 元雅早世 『夢跡一紙』(三八〇頁)参照。
- 4 嫡孫 元雅の子。後に越智で観世座を主宰し、観世十郎大夫とよばれた。
- 5 二跡 ふたすじ。観阿弥と自分(世阿弥)。
- 6 金春大夫 金春座の座長。禪竹をさす。世阿弥の女婿。
- 7 印可 仏教語。奥儀をきわめた弟子に師が認定を与えること。『維摩経』などに見える語だが、多くは禅宗や密教で用いる。

一、舞に左右左・左右右あり。これを右左右・右左右と奏づる在所あるべし。秘伝なり。(これは、清見原の御時、吉野山にて、神女天降りて、五度袖を翻へしし来歴なり)。また、私の遊樂の二曲三体を初め

- 8 一大事の秘伝の一卷 『花鏡』をさすらしい。そうすると、永享九年に写したのは(三三八頁参照)、正式に世阿弥から許可されたことで、元雅が見せたときは、全巻を写したわけではなかつたのであろう。
- 9 却来風 『九位』(二九五頁注8)参照。
- 10 力なく 「口伝ばかりにてありしなり」を連用修飾する。位置を移して訳した。
- 11 無用の事 「なすべきでない事」の意ではなく、むしろ「しなくてもすむ事」のほうであろう。却来風などいふ無上の芸を演ずるのは、たいへんな重荷なので、口伝を受けたのみだけれども、演じなくてもすむなら、それも結構だの意。世阿弥からいえば、この元雅の考えかたが、実は却来風の本意に合うらしい。
- 12 望却来、却来不急 禅句らしいが、出所不明。

一、舞樂に、左右左・左右右と舞うところがある。これを、逆に、右左右・右左右と舞う行きかたがあるであらう。これは秘伝である。(これは、天武天皇の御代に、吉野山において、神女が天くだつて、五たび袖を翻して舞つた故事を伝えたものである)。また、

て、惣じて一切の態をなす人体に、左右左・左右左と、身使ひ・振・風情・意中の意風に至るまで、これを思ふべし。これ、万曲万舞の成就、感応の妙風なり。口伝あり。

しかれば、天女の舞、舞の本曲なるべし。これを当道に移して舞ふこと、専らなり。近江の犬王得手にてありしなり。さるほどに、天女の舞は、近江申楽が本なりと申す輩あり。それはただ、犬王得手にてありしほどに、如し此云ふか。本とは申しがたし。そのゆゑは、諸曲において、その来歴の道を伝へて、口伝あることをこそ、本風とは申すべけれ。天女の舞の秘曲を、犬王、分明に相伝したりとは聞えず。まして、いづれのその者の一流の奥儀を伝へたりと云ふ印可の証見頭はれざれば、本とは落居しがたし。およそ、天女の舞の故実、人形の絵図に頭はしたり。よくよく習見あるべきなり。

また、駿河舞の書、これまた、駿河の有度浜に、天女天降りたりし来歴なり。その秘曲、申楽に伝はりたりとも聞えず。その時の、天の羽衣の袖、駿河の清見寺に留まりて、今にありと云ふ。

一、白拍子のこと。南都の維摩会の、延年より出でたり。これまた、毎年、目前の見風なれば、尋ぬべし、習ふべし。如し此の道々の来歴を伝ふるを以て、本とすべし。ただし、申楽の舞は、一切の物まねの人体によりて舞ふことなれば、取り別きて、申楽の舞の本とは、いづれを申すべきや。翁の舞、申楽の舞の本にてやあるべき。それは、別に口伝あり。たやすからず、深秘々々。

この一卷、これは元雅口伝の秘伝なり。しかれども、早世なるに依て、後世にこの題目をだにも知る人あるまじければ、紙墨に頭はすなり。もしもその人出で来ば、世阿が後代の形見なるべし。深秘々々。

永享五年春三月 日

世阿〔花押〕

民間の芸能（申楽）における二曲三体を初めとして、一般的に人があらゆる身体的動作をする演技において、左右左・左右左と動き、舞踊的動作や描写的動作の際にはもとより、心中で動きを考へる際さえも、これを忘れないようにすべきである。これが、あらゆる曲の形成されてゆく源であり、天地神明も感応せられるすばらしい芸能なのである。これには口伝がある。

そういうわけで、天女の舞が、すべての舞の原型だと考えてよろしい。その天女の舞を、わが芸に採り入れて、さかんに舞っているわけである。近江申楽の犬王大夫は、これが得意であった。そのため、「天女の舞は、近江申楽が本だ」という連中もある。それは、単に、犬王大夫が得意としたから、このようにいうのであろうか。しかし、近江申楽が本だとは言えない。なんとすれば、あらゆる芸能において、由緒の正しい道を伝えて、たしかな口伝を有するものをこそ、本来の芸といつてよいからである。天女の舞の秘曲を、犬王大夫が確実に受け伝えたとは、聞いたおぼへがない。まして、どこの名人の流の奥儀を伝えたのだという許しの証拠もはっきりしていないのだから、犬王が本であるとは決着できないことである。天女の舞のコツに関しては、要点を「人形」に示しておいた。よくよくそれを見て研究すべきである。

また、駿河舞の書というものがあるが、これもまた、駿河の

有度浜に天女が天くだった来歴を記したものである。しかし、その天女の舞った秘曲が、申楽に伝わったという話は、聞いたことがない。その時の天の羽衣の袖が、駿河の清見寺に残されて、現存しているということである。

一、白拍子舞について。これは、奈良の維摩会に際して行なわれる延年から出たものである。これもまた、毎年実際に見ることができる芸であるから、よく調べ、研究せよ。このように、それぞれの道の来歴を伝えているものを、芸の基本とすべきだ。ただし、申楽の舞というものは、あらゆる劇的所作の役がらに相応した舞をまうのだから、特別に申楽の舞の基本としては、どんなものをさすべきであろうか。あるいは、翁の舞が申楽の舞の基本なのであろうか。それは別に伝えられている口伝があつて、ちよつとと言うわけにゆかない。深く秘すべきである。

この一卷の内容は、元雅に口伝として与えた秘事である。しかし、早く世を去つたので、後世には、この名目をさへも知る人は有るまいと思われるから、書きしるすのである。万一にも後世にそれだけの人物が出て来たならば、これは、自分がその後代の人に残した形見といふべきものであろう。深く秘すべきものである。

- 1 左右左 いまの能にも「左右」とか「大左右」とかよばれる舞の型があり、まず左のほうに向きながら手を返す。右から始めることはない。
- 2 清見原の御時 「天武天皇、芳野河に御幸して、御心を澄まし、琴を弾じ給ひしに、神女空よりふり下たり、清見原の庭にて、廻雪の袖を翻しけれども、天暗うして見えざりければ、彼の玉を出だされ、仙女の形を御覧じき。玉の光に輝きて『少女子が少女さびすも韓玉を少女さびすもその韓玉を』と五声うたひつつ五度袖を翻す」（『源平盛衰記』巻一「五節始事」）。
- 3 私の遊楽 吉田博士は「私」を「彼」の誤写かと疑われ、能勢博士は「私」の形で「我々どもの」と訳されたが、共に従いがたい。上の左右左が公的な雅楽の型であるのに対し、私的な民間の芸能をさしたのであろう。
- 4 近江の犬王 日吉座の能の名手。一八五・二六八頁参照。
- 5 その者 一四三頁注2参照。
- 6 人形の絵図 一六三頁参照。
- 7 駿河舞の書 どのような文献かは不明。駿河舞は、東遊のうちで舞われる。「昔、駿河国有度浜に、神女降りて舞ひしを、野叟のまねび伝へて舞ふを、今は駿河舞として、東遊にするはこれなり」（『袖中抄』）。
- 8 維摩会 毎年十月十日から七日間、興福寺で行なわれる法会。『維摩経』を講ずる。そのあと、リクリエイションとして延年を演ずるのである。『風姿花伝』第四篇（七五頁）参照。

付 載

- 「五音」
- 「夢跡一紙」
- 「金鳥書」
- 書簡